

匂宮・紅梅・竹河の三帖における薫出生の秘事

高 木 和 子

はじめに

一 匂宮巻の論理

二 紅梅巻の論理

三 竹河巻の論理

おわりに

『源氏物語』匂宮・紅梅・竹河巻は、光源氏没後の諸状況を物語っており、宇治十帖に入る前の中継ぎ的な印象が強い。そしてこの三帖においては、薫の出生の秘事を確かに知る作中人物は不在である。しかしながら、薫自身が出生の秘事を誰かから漏れ聞き、疑っていることからしても、薫の出生の秘事は物語世界のどこかで知られていた可能性が濃厚である。だとすれば、作中人物達は、それぞれに薫の出生の秘事を実は知りながら、あたかも知らぬかのように振舞っていたことにならないだろうか。そのように解釈する余地がないかどうか、これらの三帖における作中人物達の言動の分析を通して検討した。そしてもし、薫出生の秘事を知りつつ知らぬかのように描かれているとするならば、それはなぜなのか、亡き光源氏に対する作中人物達の追憶の感情と関わらせて理解しようとする試み、というのが本稿の主な課題である。

はじめに

匂宮・紅梅・竹河巻、いわゆる匂宮三帖は、『源氏物語』正編の光源氏の物語と、橋姫巻以降の宇治十帖の世界との結節点に位置する巻々である。古くから正編や宇治十帖との別人作者説も提起され、作中人物の官位昇進や年立等の点で前後の巻々との矛盾が議論されてきた。また、その物語展開や場面設定については正編や宇治十帖との反復も指摘され、正編や宇治十帖との接続関係についても諸説が提起されている。なかでもとりわけ、竹河巻冒頭の語り手の位相については多くの注目を集めてきた。

本稿は、こうした諸論と重なりつつも、主に二つの問題点を中心に取り上げること、若干の解釈の更新を試みたい。一つは匂宮三帖において光源氏がいかに回想され、その物語展開に影響を及ぼしているか、いま一つは、薫の出生の秘事を人々がどのように認識しているか、この二点である。これらは従来に諸説においても分析の対象となつた課題ではあるが、本稿は少し異なる視点から、これらの問題について再検討したいと考える。

一 匂宮巻の論理

匂宮巻では、光源氏没後の物語の中心的人物たる、匂宮

と薫が紹介される。

光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。遜位の帝をかけたてまつらんはかたじけなし、当代の三の宮、その同じ殿にて生ひ出でたまひし宮の若君と、この二ところなんとりどりにきよなる御名とりたまひて、げにいとなべてならぬ御ありさまどもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。ただ世の常の人さまにめでたくあてになまめかしくおはするをもととして、さる御仲らひに、人の思ひきこえたるもてなしありさまも、いにしへの御ひびきはひよりもややたちまさりたまへるおぼえからなむ、かたへはこよなういつくしかりける。

（匂宮巻・小学館新編日本古典文学全集⑤一七頁）

光源氏没後の特筆すべき人物として、今上帝と明石中宮の三宮と、六条院で育つた女三宮の子との二人が取り上げられる。薫がおのずからの芳香を漂わせ、匂宮がそれに対抗すべく香に凝っているため、「匂ふ兵部卿、薫の中將」（匂宮巻・⑤二八頁）と賞讃される。ちょうど光源氏と藤壺とが「光る君」「かがやく日の宮」（桐壺巻・①四四頁）と並び称されたことを思わせるから、匂宮・薫の二人の若者を、光源氏没後の物語の主役に仕立てて物語を開陳する試みで

あることは疑いない。しかし、そもそも「いとまばゆき際にはおはせざるべし」と、光源氏のような超絶的な魅力は兼ね備えておらず、ただ高貴で優美で、世間がもてはやするために、若き日の光源氏より世評がまさる、と紹介される男君達には、所詮は限界もあろう。

このような男君達が物語の主役を担うところに、光源氏の世界とは異なる、より等身大の人間世界の物語としての特質が見出されてきた。とはいえ、主人公の設定としては、どこか物足りない印象が拭えないこともまた確かである。

そこで注目されるのは、薫の出生の秘事をめぐる人間関係である。薫は、誰かから耳にして、自身がその出生に何らかのいきさつを抱えている事に勘付いているが、詳細を問いたです相手もないという。出生の秘事が薫に現世の栄耀栄華に諦念を抱かせ、仏道へと傾斜させ、ひいては宇治八宮一族との関わりの契機となることは、周知の通りである。薫自身が不審を抱いていた出生の詳細は、宇治八宮邸に仕える女房の弁の君によつて語られた。薫はその秘密が宇治の女君達に知られるのではないか、という懸念（椎本巻・⑤二〇一頁）もあつて、宇治の人々との因縁から逃れ切れずに生き続けることになる。

しかしながら、作中の薫とは違つて、薫の過去をまざまざと見てきた我々読者は、その秘密を知る可能性のある人

物が他にもいることを知っている。夕霧である。柏木巻で、死を目前にした柏木は夕霧を枕頭に呼んで、心ならずも光源氏に勘気をこうむつたことの詫びを伝えるように夕霧に頼んだ（④三一六頁）。そして横笛巻、柏木の没後、その未亡人の落葉宮に柏木遺愛の笛を託された夕霧は、夢に出現した柏木に、笛を伝えるべき別の人物の存在を暗示される（④三六〇頁）。夕霧は六条院を訪れ、薫の中に亡き柏木の面影を探り（④三六四―三五頁）、さらには光源氏に事の真相を問いただそうと向き合うのだが、光源氏はいくらも逃げおおせて真相は闇に葬られたかのようにあつた（④三六六―九頁）。夕霧はその後、薫の出生の秘密について思念することはない。続く夕霧巻では、夕霧の関心はもっぱら落葉宮に向かつており、柏木の存在は遠のく。従つて我々読者は、夕霧は光源氏の巧みな防衛に、ついに真相に近づけぬままに終わったのだ、と解釈するのが通常である。しかし、このような重大な疑念が人の心にひとたび芽生えたからには、どこまでも脳裏に焼きついて離れないのが自然であつて、物語がそれを取り上げようとしなのは、表立つて話題にすることを回避しているに過ぎない、もしくは、その問題を棚上げすることで別の課題へと物語の焦点を移そうとしているに過ぎない、とは考えられまいか。柏木は無理に生きながらえて世評の種となるよりも死を

望んでいたから（柏木巻・④二九〇頁）、臨終に際して、自身の親族でなく夕霧に遺言をしたのは、事の真相が世間に漏れることを恐れ、六条院のうちに隠蔽される事を望んだからだと考えられよう。それが光源氏の許しと、生まれる子の将来を願った柏木の最期であった。とすれば、あれほど生真面目一筋であった夕霧の、落葉宮への強引なまでの求愛も、柏木周辺の負の遺産の回収——もしかすると薫の出生の秘密を察知しているかもしれない落葉宮を自らの手の内に引き取る行為——だったのかもしれない。物語は表立ってはまったくそうした動機付けを語ろうとはしないけれども^⑤。

夕霧が薫の出生にまつわる疑念を心に秘めている可能性がありながら、表立っては決して語らないというこの物語の基本姿勢を踏まえて、ふたたび匂宮巻の叙述に戻ろう。

薫の人間関係について最初に言及されるのは、冷泉院の寵愛である。

二品の宮の若君は、院の聞こえたまへりしままに、冷泉院の帝とりわきて思しかしづき、後の宮も、皇子たちなどおはせず心細う思さるるまゝに、うれしき御後見にまめやかに頼みきこえたまへり。

（匂宮巻・⑤二一―二頁）

光源氏の遺言によって、冷泉院はとりわけ薫を可愛がるの

だという。薫は、竹河巻でも、「冷泉院に御子のやうに思しかしづく四位侍従」（⑤六三頁）と語られ、冷泉院の寵愛は一貫している。もとより冷泉院や秋好中宮にとつては、あくまで光源氏の晩年の子としての薫への厚遇であり、薫の出生の秘事への疑念が描かれることはない。冷泉院の出生も世間的には知られていないから、表向きはあくまで秋好中宮の養父であった光源氏の忘れ形見という理由で、薫に愛情を注ぐのだと見せているという。

それにしても、光源氏はなぜ薫を冷泉院に託したのか。

薫が光源氏の実子であれば、実子への愛着ゆえに安泰な人生を願って院に託した、とも解釈できよう。しかし、薫が不義の子であることを知っている光源氏の冷泉院への依頼は、もう少し意味深い。不義の子を、不義の子に託す——薫が冷泉院の出生の秘事を知らず、冷泉院が薫の出生の秘事を知らない中で、その企みが光源氏の心一つに進められたのだとすれば、自らの死後までも、人間関係を高めから操っていく光源氏の演出が見て取れる。光源氏没後の物語である匂宮巻が、生前と同様に光源氏讃美から始まることからしても、光源氏の没後までも続く無言の支配を物語る形になっていることは否むべくもない。宇治八宮の存在が薫に知れるのは、八宮と交流する阿闍梨が冷泉院に出入りし、冷泉院の御前で宇治の人々が話題となったことに端を

発するから（橋姫巻・⑤一二八―一三〇頁）、冷泉院と薫をつなぐ目に見えぬ糸は明らかで、煎じつめればそれが光源氏の配置だったという脈絡は、少なくとも物語の構造上は十分に読み取れるのである。

それでは、冷泉院は、薫の出生の秘事を本当に知らなかったのだろうか。冷泉院の薫への溺愛は、実父光源氏の遺志に従うものであり、薫を実弟と見るがゆえのものなのであろうか。あるいはそれを超えて、冷泉帝は薫の出生の秘密を実は察知しており、自らの不義の子としての複雑な内面を薫に託し、その人生を自らと双子のように、陰画のように見ている、だからこそ溺愛するのだと考える余地はないのだろうか。

物語はそうした読者の忖度を、周到に遮断する。

上にも宮にも、さぶらふ女房の中にも容貌よくあてやかにめやすきは、みな移し渡させたまひつつ、院の内を心につけて、住みよくありよく思ふべくとのみ、わざとがましき御あつかひぐさに思されたまへり。故致仕の大殿の女御ときこえし御腹に、女宮ただ一ところおはしけるをなむ限りなくしづきたまふ御ありさまに劣らず、後の宮の御おぼえの年月にまさりたまふけはひにこそは。などかさしも、と見るまでなん。

（匂宮巻・⑤二二頁）

冷泉院も秋好中宮も、よい女房はみな薫にあてがい、格別に住みやすく、と配慮を重ねるという。秋好への寵愛が格別であることに因果づけた後に、「などかさしも、と見るまでなん」と語り収める。なぜでしょうね、と思わせぶりな疑問を投げかけつつ、表面的には秋好中宮への寵愛ゆえだと語り、事態を巧みに隠蔽する。

もし冷泉院が何も気づいていないのなら、いささか喜劇的である。しかし、冷泉院が薫の出生の秘事に気づく可能性を、物語は発展させようとしなない。それは、薫の出生の秘事にぎりぎりまで接近した夕霧が、結局のところ事の真相に辿り着けない、少なくとも物語の叙述の上で、それが明示されることがないのと、ちょうど同じからくりなのである。

このように、薫の出生の秘事が実は世間に漏れ出ているにしても、それによって生じるさまざまな軋轢の物語が模索される可能性は、あらかじめ放棄されているようにも見える。

だが、それならば薫は、どのようにして自らの出生に疑念を抱くに到ったのか。「幼心地にほの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおぼつかう思ひわたれど、問ふべき人もなし」（匂宮巻・⑤二三頁）とあるように、薫は自身の出生にまつわる秘密を薄々知っており、事の真相を

知りたいものの、確かめる術を持たないのだという。

事にふれて、わが身につがある心地するも、ただならずもの嘆かしくのみ思ひめぐらしつつ、宮もかく盛りの御容貌をやつしたまひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむきたまひけん、かく、思はずなりける事の乱れに、かならずうしと思しなるふしありけん、人もまさに漏り出で知らじやは、なほつつむべき事の聞こえにより、我には気色を知らする人のなきなめり、と思ふ。

(匂宮巻・⑤二四頁)

何か自分には仔細があると思う薫は、母女三宮の出家の経緯にも疑念を抱いており、周囲の人々は真相を知りながらも自分に隠しているのではないのか、と考える。薫自身はというと、「かの過ぎたまひにけんも安からぬ思ひにむすほほれてや、など推しはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて」(匂宮巻・⑤二四頁)と、実父は若くして亡くなった柏木だと定かに知っているのである。

薫はいったい誰から、この出生の秘密を耳にしたのであろうか。女三宮周辺の女房と考えるのが自然だろうが、その出所が明示されることはない。そしてもし、そのような女房達の噂のレベルで事の真相が語られているのなら、夕霧をはじめとする光源氏の遺児達が真相を知らないままで済むだろうか、という疑念も湧いてくる。薫自身が、い

つたい誰が事の真相を知っているのか、という疑心暗鬼から逃れられないのはもとより、それはひとえに薫の内面の問題にとどまることなく、読者にとっても、作中人物のさまざまな思惑についての疑念を向ける契機となるはずである。

匂宮巻の叙述は、冷泉院の寵愛、薫の出生を悩む内面に引き続き、明石中宮や夕霧との関係へと及んでいく。

内裏にも、母宮の御方さまの御心寄せ深くて、いとあはれなるものと思され、後の宮、はた、もとよりひとつ殿にて、宮たちももろともに生ひ出で遊びたまひし御もてなしをさをさ改めたまはず。「末に生まれたまひて、心苦しう、おとなしうもえ見おかぬこと」と、院の思しのたまひしを思ひ出できこえたまひつつ、おろかならず思ひきこえたまへり。右大臣も、わが御子どもの君たちよりも、この君をば、こまやかにやむごとなくもてなしかしづきたてまつりたまふ。

(匂宮巻・⑤二五頁)

今上帝が薫を重んじるのは、異母姉妹にあたる女三宮の子だからだとされる。また、明石中宮は、自分の子の宮たちと一緒に六条院に育った薫だから可愛がるのだという。しかも、光源氏が生前、薫の行く末を見届けられないと惜しんでいたのを受けての愛着だ、と説明される。その限りで

は、今上帝にも明石中宮にも、薫の本来の出生に疑いを抱く痕跡は見つけにくく、ここでもただ、光源氏の遺言の呪縛が生きているようである。一方、「右大臣」すなわち夕霧に関しては、実の子供たちよりも薫のことを愛情深く大切に世話する、と、簡略に述べられるばかりである。夕霧がなぜ薫をそこまで大切にするのかについて、格別には説明されない。あえて言えば、簡略にしか語らない姿勢こそが、夕霧の薫への思い入れの真の動機を隠蔽するのだ、と見ようと思えば見えなくもない。

このように光源氏没後の物語の展開には、光源氏の藤壺との不義、柏木の女三宮との不義という過去の秘事がいたるところに潜伏し、事の真相を知らないように見える作中人物たちの喜怒哀楽の表層の物語展開とは別次元で、事の真相を知る読者が高みの見物をする、という二重構造が浮かび上がってくる。それは作中で唯一、確かにこの二つの秘事を知っていた光源氏の視点を読者が共有するからだ、と言い換えてもよい。しかし、実は本当は誰かが知っているのではないのか、という疑念が薫と読者に共有されること——それが、光源氏没後の物語を牽引する大きな論理軸となるはずである。

二 紅梅巻の論理

匂宮と薫とを紹介した匂宮巻に続く紅梅・竹河巻は、時間的な重複もあり、匂宮や薫のいづれかに焦点を据えてその動静を語る、という展開にはなっていない。紅梅巻は亡き柏木の弟にあたる紅梅大納言の、先妻腹の娘の大君・中の君および、蜷宮の遺児で真木柱の連れ子である宮の御方の結婚問題を語っており、竹河巻は玉鬘の大君・中の君の結婚問題を中心に展開していく。なるほど紅梅巻では、紅梅大納言が匂宮を婿にと望み、後者では、玉鬘の大君に薫が淡い思慕を寄せるものの、それぞれの巻では、匂宮、薫が中軸というわけでもない。紅梅巻では、紅梅大納言の、真木柱の連れ子である継娘の宮の御方への懸想が印象的であるし、竹河巻では、夕霧と雲居雁の子である蔵人少将の大君への執着が中心的で、まるで往年の柏木を思わせるほどであるからである。

それでは、匂宮と薫を物語のやや遠景に追いやった紅梅・竹河巻は、どのような論理によって構築されているのか。まず一つには、姉妹の一方に求婚する男、という型の反復である。紅梅大納言家の、先妻腹の二人の姉妹と真木柱の連れ子という姉妹の設定にせよ、竹河巻における大君・中の君という設定にせよ、いずれも宇治八宮の大君・

中の君姉妹と異母姉妹の浮舟という設定を予感させる。姉妹を一つものとして求婚する物語、あるいは垣間見に始まる求愛という展開は、言うまでもなく『伊勢物語』初段が先蹤であつた^⑥。空蟬巻で空蟬・軒端荻の囲碁打つ姿を光源氏が垣間見した場面が、竹河巻で蔵人少将が玉鬘の大君・中の君の囲碁打つ姿を垣間見する場面に、橋姫巻で薫が宇治八宮の大君・中の君の琴・琵琶演奏を垣間見する場面にと、同工異曲の展開が変奏されている。

さらには、蜷宮と真木柱の娘の宮の御方にせよ、玉鬘の大君・中の君にせよ、実父を亡くした娘の結婚にまつわる悲哀、といった課題も繰り返される。それは、桐壺更衣や空蟬から延々と繰り返された、父を亡くした娘の結婚の悲哀の物語の反復であり、それが宇治八宮の姉妹の結婚問題にも継承される、という系譜は見えやすい。

このように紅梅・竹河巻には、これまでの物語の類型の反復が目立つだけに、正編の光源氏の物語に続き、宇治十帖の物語を本格的に始動させる中継ぎ的な評価を脱することが難しく、物語の試行錯誤の過程、ひいては別人作者説までも生むこととなったのである。

しかし、今一度これら三帖を俯瞰するならば、これらは、もとより柏木の出生の秘事に関わりつつ、煎じつめれば柏木没後の頭中将一族と、光源氏没後の一族への関心に集約

されるのではないか。すでにたとえば、匂宮巻を六条院世家、紅梅巻を紅梅世家、竹河巻を鬘黒世家、宇治十帖を薫列伝ととらえる説もあるが、形態にしたがつたそうした理解を妥当と認めつつ、より収斂された長編世界として理解するために、もう一步踏み込んだ理解を探りたいのである。紅梅巻は、柏木の弟にあたる按察大納言の紹介にはじまる。

そのころ、按察大納言と聞こゆるは、故致仕の大臣の二郎なり、亡せたまひにし衛門督のさしつぎよ、童よりうらうじう、はなやかなる心ばへものしたまひし人にて、なりのぼりたまふ年月にそへて、まいていと世にあるかひあり、あらまほしうもてなし、御おぼえいとやむごとなかりけり。(紅梅巻・⑤三九頁)

その後の物語においてほとんど重要な役割を占める事のない、亡き柏木の弟の紅梅大納言の紹介から、この巻が始まるのはなぜなのか。紅梅大納言が真木柱と再婚していると明かされ、先妻の娘達の結婚話へと移行する。娘達の結婚譚という意味では、なるほど竹河巻や宇治十帖の先蹤である。しかし、この巻が「故致仕の大臣の二郎なり、亡せたまひにし衛門督のさしつぎよ」と紹介されるからには、柏木の縁者だからこそ語るのだという脈絡が暗示され、つまりは柏木没後の頭中将一族の物語として読むことができる。

にもかかわらず、紅梅大納言の心を占めるのは、亡父の頭中将でもなければ、兄の柏木でもない。むしろ光源氏なのであった。

「……故六条院の御伝へにて、右大臣なん、このごろ世に残りたまへる。源中納言、兵部卿宮、何ごとにも昔の人に劣るまじういと契りことにものしたまふ人々にて、遊びの方はとりわきて心とどめたまへるを、手づかひすこしなよびたる撥音などなん、大臣には及びたまはずと思ひたまふるを、この御琴の音こそ、いよくおぼえたまへれ。……」

（紅梅巻・⑤四五―六頁）

今上帝に入内した大君に付き添って真木柱が宮中に上がっている間に、紅梅大納言は、真木柱の連れ子である宮の御方に関心を寄せ、楽器の演奏を所望する。紅梅大納言は、亡き光源氏の演奏の継承者としてまず夕霧を挙げ、薫と匂宮も万事につけて昔の人々に劣らない才を発揮するが、夕霧の演奏には及ばないと言い、しかし宮の御方の音色は夕霧に大変よく似ている、と言う。宮の御方に、光源氏から夕霧への秘伝に類するものを感じるの、宮の御方が光源氏の弟で、とりわけ芸道にすぐれていた蜷宮の娘だからであろう。

さらに紅梅大納言は、庭先の美しい紅梅を見ては、

「あはれ、光る源氏といはゆる御盛りの大將などにおはせしころ、童にてかやうにてまじらひ馴れきこえしこそ、世とともに恋しうはべれ。この宮たちを世人もいとことに思ひきこえ、げに人にめでられんとなりたまへる御ありさまなれど、端が端にもおぼえたまはぬは、なほたぐひあらじと思ひきこえし心のなしにやありけん。……」

（紅梅巻・⑤四八頁）

ともつばら光源氏を讚美し、光源氏との宴席を懐かしんだ挙句に、「いかがはせん。昔の恋しき御形見にはこの宮ばかりこそは」（⑤四八頁）と、匂宮を中の君の婿にと期待を寄せるのである。

光源氏を讚美し懐かしむに際して、匂宮・薫のいずれかに託すのであれば、世間的に光源氏の子である薫を讚美するのが自然である。見ようによつては充分に魅力的なはずの薫を差し置いて、光源氏の後継者を匂宮しかいない、と紅梅大納言が感じるところには、先の光源氏と夕霧と宮の御方の三者に演奏の類似を見出した発言とあいまって、暗に薫を光源氏の系譜から排除しているのではなからうか。

その薫について、紅梅大納言は、真木柱との対話の中で次のように語っていた。

「……源中納言は、かうざまに好ましうはたき匂はきで、人柄こそ世になけれ。あやしう、前の世の契りい

かなりける報いにかと、ゆかしきことにこそあれ。同じ花の名なれど、梅は生ひ出でけむ根こそあはれなれ。

……

(紅梅卷・⑤五四頁)

紅梅大納言は、薫から匂い立つ芳香も讚美せず、その人柄、前世の因縁を「ゆかし」と言い、生まれ出でた「根」を「あはれ」と言う。匂宮に対する関心とは明らかに異質である。それは、薫の出生の秘事に疑念を抱くがゆえの、事の因縁を「ゆかしく」知りたく思い、その生の「根」に「あはれ」と深い共感を示すものではなかったか。

紅梅大納言が、薫の出生の秘事を知っている、と明瞭に語る箇所はない。従って、薫の出自を知らないものとして、通常は理解されている。もし紅梅大納言が薫の出自を知っていたならば、亡き兄柏木の忘れ形見として特別な愛着を見せるのが自然だから、そうした言及がない以上、紅梅大納言は薫の出生の真実を知らないのだという判断であろう。しかし、この物語が光源氏没後も讚美の追憶を人々に繰り返しさせ、光源氏を機軸とする世界観を継承するからには、光源氏の大きな瑕釐である柏木密通事件を話題にしないのは、この物語の暗黙の方法だからなのだと考えるのが穏当ではあるまいか。

桐壺院が光源氏と藤壺の密通を知っていたかどうか、物語はそれをあくまで表立つては描かず、晩年、柏木・女三

宮の密通事件に直面した光源氏を、もしや父も知っていたのでは、と恐懼させるとどまった。同様に、紫の上が光源氏と藤壺の関係を知っていたのかどうか明瞭にされることはない。この物語は、光源氏に関わる二つの重大な密通事件を、登場人物たちに見て見ぬふりをさせておくことで、光源氏の世界の調和を保つ、というのが一貫した方法なのである。桐壺院や紫の上が知っていたか否かを話題にしないことは、知らなかった事と同義ではない。⁽⁸⁾これと同様に、夕霧も、紅梅大納言も、薫出生の秘事を知っていた可能性を充分に孕みつつ、その問題にあえて触れない語り方をする、というのが匂宮巻、紅梅巻のありようではなかったか。

三 竹河巻の論理

柏木没後の頭中将家の後日談としての紅梅巻の状況は、竹河巻にも継承されていく。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまこ

とならむ。

(竹河巻・⑤五九頁)

竹河巻の冒頭は、この巻を「紫のゆかり」の物語ではなく「後大殿わたり」の物語と宣言している。「後大殿」とは、紅梅巻冒頭に「後太政大臣の御むすめ、真木柱」(⑤三九頁)とあった「後太政大臣」に相当すると考えれば鬚黒のことであるから、従って竹河巻は、鬚黒没後の一族を語ったものである。

しかし、この巻は鬚黒その人を話題にする箇所は少なく、ただ鬚黒の死による一族の不如意が歎かれるに終始しており、それからすれば、この巻の中心的人物は、やはり玉鬻であらう。玉鬻は鬚黒の没後、大君を冷泉院に参院させた結果、一方では夕霧・雲居雁夫妻の子である蔵人少将に怨まれ、一方では異母姉妹の弘徽殿女御との関係も軋み始める。玉鬻・雲居雁・弘徽殿女御らは、いずれも旧頭中将の娘達であった。ここを基点に溯って紅梅巻における紅梅大納言から連接させれば、これらはまさに旧頭中将家の子女たちの物語、柏木没後のその兄弟姉妹達の物語だということになる。

いま少し丁寧な竹河巻の状況を辿っておきたい。鬚黒と玉鬻には、男子三人、女子二人の子があった。鬚黒没後の玉鬻は頭中将一族とはやや疎遠で、むしろ夕霧と昔ながらの親交を保っていた。父を亡くした鬚黒の男子たちは元服

後もうだつが上がらない。生前の鬚黒の奏上もあって、大君には帝から出仕の要請があったが、かつて玉鬻自身に慕情を寄せた冷泉院からも打診される。夕霧と雲居雁の子である蔵人少将も熱心に求婚するが、玉鬻は臣下に娶らせる気はない。とはいえ、後見のない宮仕えは難しく、加えて今上帝には光源氏の娘の明石中宮がおり、冷泉院には異母姉妹の弘徽殿女御と、光源氏の養女の秋好中宮がいる、というので玉鬻は苦慮した挙句、薫を婿にどうか、と思った。六条院の御末に、朱雀院の宮の御腹に生まれたまへりし君、冷泉院に御子のやうに思ひかしづく四位侍従、そのころ十四五ばかりにて、いとぎびはに幼かるべきほどよりは、心おきておとなおとなしく、めやすく、人にまさりたる生い先しるくものしたまふを、尚侍の君は、婿にても見まほしく思したり。

(竹河巻・⑥六三頁)

玉鬻が薫の人柄や将来性を評価し、婿にどうかと思うのだが、語り手はその動機を「六条院の御けはひ近うと思ひなすが心ことなるにやあらむ」(竹河巻・⑥六四頁)と、光源氏に似ていると感じるからなのか、と説明する。玉鬻は新年の挨拶に訪れた薫と対面し、

大臣は、ねびまさりたまふまに、故院にいとようこそおぼえたてまつりたまへれ、この君は、似たまへる

ところも見えたまはぬを、けはひのいとしめやかにな
まめいたるもてなしぞ、かの御若盛り思ひやらるる、
かうざまにぞおはしけんかし、など、思ひ出できこえ
たまひて、うちしほたれたまふ。

(竹河巻・⑤七〇頁)

などと、夕霧は老いるに従って光源氏に似るが、薫は似ていない、しかし光源氏も若い頃はこんな風だったのだらうと、光源氏への追憶から薫に心を傾ける。玉鬘は薫に対して、光源氏の子として愛着をおぼえつつ、光源氏には似ていないことをも正確に観察している。

玉鬘は大君を冷泉院に参院させる決断をし、玉鬘の息子達が家の将来のために望んだ今上帝への入内も、蔵人少将の切願も、薫の思慕も実らない。後見なきまま今上帝に入内させることを躊躇する一方、冷泉院の弘徽殿女御に参院を促されての決断であった。そこには、玉鬘の冷泉院との古い因縁——かつて所望され、自らも心惹かれつつ、その思いに答えられなかった関係への埋め合わせ、という秘めたる脈絡が底流し(⑤六二頁)、冷泉院も思慕の情を抱き続ける(⑤七八頁、一〇三頁)。だがその脈絡は、周囲に語れるものではないために、大君を冷泉院に参院させた玉鬘の判断は、誰から見ても解せない、不満の残る選択と受け止められる。夕霧・雲居雁の子である蔵人少将は、まる

でかつての柏木のように、いつまでも大君に執着し続ける。また、大君が冷泉院の女宮ばかりか男宮までも出産すると、これまで容認していた弘徽殿女御や秋好中宮も、不愉快さをあらわにし始め、次第に玉鬘は窮地に追い込まれるのである。

こうした展開は、当初から玉鬘に想像が及ばなかったわけでもなからう。にもかかわらず、あえて玉鬘が、大君の冷泉院参院を決断したのはなぜなのか。冷泉院との古い因縁とは、かつて行幸巻で光源氏と冷泉院の酷似をまざまざと確認したという因縁、光源氏への玉鬘の追憶ではなからうか。⁹⁾薫の中に光源氏の面影を探す玉鬘の心情としては、充分に想定できる動機である。さらには、玉鬘が大君の結婚相手として今上帝や東宮を選ばないのは、今上帝には明石中宮が、東宮には夕霧の大君が入っており、光源氏の子女達の栄華に遠慮したからだとも考えられる。¹⁰⁾

そのような価値軸は、実は冷泉院にもどこか共有されている。「源侍従の君をば、明け暮れ御前に召しまつはしつつ、げに、ただ昔の光る源氏の生ひ出でたまひしに劣らぬ人の御おぼえなり」(⑤九二頁)と、冷泉院と薫の関係を、桐壺帝と光源氏の関係になぞらえて語る語り口といい、新年の男踏歌が冷泉院に参上した際には、「故六条院の、踏歌の朝に女方にて遊びせられける、いとおもしろかりきと、

右大臣の語られし」(⑤九九頁)と、光源氏存命中の盛時を追憶するありようといひ、いづれも冷泉院に関わる文脈で光源氏は追憶されるのである。その意味で、鬚黒没後の玉鬘と、退位して時を経た冷泉院とは、かつての光源氏の盛時を懐古しつつ現在の衰微を自覚する点で、共通の心ざまを抱えている。

それにしても、冷泉院の薫への寵愛を、桐壺院の光源氏への寵愛になぞらえる語り手は、なんと皮肉なことか。桐壺院は桐壺更衣亡き後、光源氏を手許に引き寄せ、女御達の御簾の内まで連れ入ったが、それはやがて光源氏の藤壺との密通へと発展した。桐壺院は光源氏の密通を知っていたのか否か、この物語は最後まで明らかにしない。知らないままに光源氏を寵愛し、冷泉帝を東宮にしたとすれば、滑稽ですらあったとも言える。そして今、光源氏の不義の子冷泉院が、薫を光源氏の実子と信じて寵愛していたならば、ちょうど同様の滑稽さを生きていることになる。

竹河巻冒頭の語り手の、鬚黒家の女房を名乗る語りに縛られれば、この巻の語り手は冷泉院の出生の秘事や、薫出生の秘事を知らない、あるいは無関心である、といった解釈に傾きがちである。しかし物語の語り手は、さほど実態的に一貫性のあるものではない。明らかにこの巻においても、二つの密通の秘事は脈々と底流しているのである。

玉鬘は、薫が実は柏木に似通う事も知っていた。

「常に見たてまつり睦びざりし親なれど、世におはせずなりにきと思ふにいと心細きに、はかなき事のついでにも思ひ出でたてまつるに、いとなんあはれなる。

おほかた、この君は、あやしい故大納言の御ありさまにいとようおぼえ、琴の音など、ただそれとこそおぼえつれ」とて泣きたまふも、古めいたまふしるしの涙もろさにや。

(竹河巻・⑤七二頁)

正月下旬に、薫が玉鬘邸を訪れると、蔵人少将が琵琶や箏の琴の音に心を惑わしていた。連れ立って内に入ると、玉鬘は和琴を差し出してくる。薫と蔵人少将は互いに譲り合うが、玉鬘は薫の演奏が亡き頭中将の爪音に似通うとの噂だから聴いてみたい、と促した。わずかに奏した薫の琴の響きに、さほど身近ではなかった親とはいえ、亡くなった今は慕わしいと玉鬘は感慨深げに言い、薫の琴の音が柏木に酷似していると言うのである。

ここまでくると、なぜ紅梅巻で、光源氏の演奏の系譜として夕霧と宮の御方が挙げられ、薫には言及されなかったかが明らかになってくる。音楽の演奏の系譜についての紅梅巻と竹河巻の叙述は、相補的なのである。

だとすれば、最前に掲げた、玉鬘の薫への批評、「けはひのいとしめやかになまめいたるもてなしぞ、かの御若盛

り思ひやらるる、かうざまにぞおはしけんかし、など思ひ出できこえたまひて、うちしほたれたまふ」(竹河巻・⑤七〇頁)の「かの御若盛り」とは、光源氏の若き日ではなく、柏木の若き日と解釈する余地がないかどうか、改めて疑われてはこないだろうか。ともあれ玉鬘は、一方では光源氏のよすがとして薫を懐かしみながら、一方では頭中将や柏木のよすがとして薫を見ており、玉鬘がどこまで事の真相に近づけるか、読者をやきもきさせる。けれども、玉鬘が薫の出生の秘事を定かに知るとは、どこにも明らかにされることはない。それは、夕霧、冷泉院、紅梅大納言が、秘事に近づけそうで近づけなかったのと全く同様である。光源氏への深い憧れゆえに、ついに近づけない、よしんば知つていようと言葉に出せない、というのが、彼らを覆う一貫した論理なのである。

とはいえ、物語は柏木を忘れることはない。蔵人少将の大君思慕の物語が、柏木の女三宮思慕の物語を顕著に踏まえていることは、桜のもとでの垣間見(⑤七五―八〇頁)、中将のおもとへの仲立ちの切願(⑤八四―八六頁)、「あはれと思ふ、とばかりだに一言のたまはせば、それにかけとどめられて、しばしもながらへやせん」(⑤八九頁)の懇願等に明らかであつて、竹河巻は作中人物の意識の上でも、物語の構造の上でも、柏木を追憶する巻なのであつた。

竹河巻末尾では、夕霧が左大臣に、紅梅大納言が右大臣に、薫が中納言に、蔵人少将であつた三位中将は宰相に、と昇進が語られる。

左大臣亡せたまひて、右は左に、藤大納言、左大將かけたまへる右大臣になりたまふ。次々の人々なり上がりて、この薫中将は中納言に、三位の君は宰相になりて、よろこびしたまへる人々、この御族より外に人なきころほひになんありける。(竹河巻・⑤一〇七頁)

これらの昇進が後統の卷々と矛盾し、成立構想論上の物議をかもすという課題には、今は触れない。「この御族より外に人なき」とは、光源氏一族と旧頭中将一族の繁栄のことといえよう。新年の男踏歌の折にも、「右の大殿、致仕の大殿の族を離れて、きらきらしうきよげなる人はなき世なりと見ゆ」(竹河巻・⑤九六頁)とあつたから、要するに竹河巻は、光源氏一族と頭中将一族のその後の繁栄を物語つて、それに反照される形で鬚黒一族の不遇を照らし出すものなのである。だとすれば竹河巻冒頭の語り手は、この巻の視点が、光源氏・頭中将側の繁栄の側に寄り添うものではなく、不遇な鬚黒一族の側に寄り添うことを宣言したということになる。

思えば玉鬘は、光源氏のゆかりの人であり、頭中将のゆかりの人なのであつた。

中納言になった薫が挨拶に訪れると、玉鬘は、鬚黒死後の没落やるかたない我が邸への薫の訪問を、「かくいと草深くなりゆく律の門を避きたまはぬ御心ばへにも、まづ昔の御こと思ひ出でられてなん」(⑤一〇七八頁)と、光源氏の紡いだ縁と考え、親しみを覚えていた。玉鬘は問わず語りに、冷泉院に参院した大君周辺に生じた確執と自らの窮地を訴えて泣き、冷泉院へのとりなしを求める。こうした玉鬘の薫への親近感、玉鬘の自覚の有無を超えて、薫の実父が柏木であることを知る読者に、玉鬘にとつて薫は、異母兄弟にあたる柏木の忘れ形見なのだ、というもう一つの脈絡を思い出させる。

玉鬘が頭中将の子でありながら光源氏の子として処遇されたように、薫は柏木の子でありながら光源氏の子として処遇されている。玉鬘と薫は、頭中将一族と光源氏一族の双方の系譜に位置づけられる両義的な存在なのであって、それゆえに、そのどちらの系譜にも安住の場を探し得ない。竹河巻は、それを炙り出すべく作られたものではなかったか。さらに巻末では、玉鬘の邸の東隣の紅梅大納言の、右大臣昇進の大饗の様が描かれる。

兵部卿宮、左の大臣殿の賭弓の還立、相撲の饗などにはおはしまししを思ひて、今日の光と請じたまつりたまひけれどおはしませず。心にくくもてかしづきた

まふ姫君たちを、さるは、心ざしことに、いかでと思ひきこえたまふべかめれど、宮ぞ、いかなるにかあらん、御心もとめたまはざりける。源中納言の、いとどあらまほしうねびととのひ、何ごとにも後れたる方なくものしたまふを、大臣も北の方も目とどめたまひけり。(竹河巻・⑤一一頁)

夕霧邸の宴には匂宮が出向くというので、紅梅大納言も匂宮を自邸に招き、娘との縁談の進展を願うが、匂宮は訪れない。それに代わるように、紅梅と真木柱は、訪問した薫に目をとどめるといふ。この脈絡からすれば、紅梅夫妻の薫への関心は、娘の結婚相手としての期待だ、と解するのが自然ではあろう。しかしここには具体的な叙述がないだけに、紅梅の薫への関心の内実は明瞭ではなく、従って柏木の子に対する愛着である可能性は捨てきれないのである。それはあたかも匂宮巻で、夕霧の薫に対する格別な寵愛を語りながら、その所以を詳細に語らなかつたことに似ている。

隣の紅梅の邸の喧騒を耳にした玉鬘は、夫鬚黒が存命だったから自邸もさぞ賑やかだったろうのにと、鬚黒の先妻の子である真木柱の幸せを羨み、昇進して訪問してきた夕霧親子に、我が一族の衰運を歎いて泣き、竹河巻は幕を閉じる。年立上の矛盾を犯してまでの紅梅や夕霧達の昇進は、

ひとえに玉鬘の悲哀を際立たせるために違いない。こうした結末を見れば、竹河巻頭に見られた、鬚黒家に仕えた女房が一族の末路を語ったものの、としての性格が再度確かめられてこの巻は閉じるようではある。しかしそうした鬚黒一族ゆかりの者、という限定的な位相に縛られ過ぎて、この巻を説明し尽くす事はできない。

むしろ頭中将一族と光源氏一族との双方に関わりながら、どちらにも属する事のできない玉鬘に寄り添って語る巻、という理解が妥当なのではなからうか。頭中将一族の複雑な人間関係に苦慮し、光源氏の一族である夕霧や薫にわずかな救いを求める玉鬘なのだが、最後に巡り合う薫は、実は柏木の子だという皮肉な循環に行き着くのだ。

竹河巻において薫は、玉鬘に、光源氏のよすがとしても、柏木のよすがとしても愛着される。玉鬘が薫の出生の秘事にどこまで近づけているかについては、例によって棚上げにされる。ただこの竹河巻で、薫の、不義の子としての宿命、光源氏一族と頭中将一族との、双方の系譜に関わりながら、どの一方にも安住できないありようが照らし出されることは、宇治十帖の前提として不可避な道筋であったのかも知れない。

おわりに

竹河巻冒頭の語り手の前置き、すなわち、鬚黒一族ゆかりの語り手の語る物語なのだ、という宣言に導かれて、竹河巻の語り手の位相を、その他の巻の語り手の位相と比較しながら論じる議論は多い。その探究の有効性を一方で認めつつも、作中の語り手は、時には都合主義的で、必ずしも実在の人物に准えられるわけではない。『源氏物語』における語り手は、全編を通じて、柔軟に変幻自在に縦横無尽に、その立ち位置をずらしていく。語り手をことさらに実体化し過ぎることに懷疑を抱く立場からすれば、竹河巻冒頭の語り手の言辞に縛られるのではなく、そのような語り手を仮構し駆使しつつ、竹河巻がいかなる物語世界を開陳しようとするかが注目されてこよう。

匂宮三帖は、光源氏没後のあらたな中心人物、薫と匂宮とを得て、物語を開始させる巻々である。そこに潜伏する薫の出生の秘密について、冷泉院はどこまで承知の上で寵愛するのか、夕霧はどうか、紅梅はどうか、玉鬘はどうかという果てしない疑問が喚起される。そして、それは彼らの内面としても、薫の内面としても、ついにこの物語で追及されることはない。人々はまるであたかも薫を光源氏の子と思ひ込んでいるかのように、この問題を思念にのぼ

せる事はないし、薫自身もそのような疑いの目で人々の言動に猜疑の目を向けることはない。それは晩年の光源氏が周到に隠蔽した秘事には、その没後も結局誰も近づく事が許されないと物語らんばかりに、見事にその課題は棚上げにされていく。その意味で、光源氏の力は、いまだ犯すべからざるものとして、おおむね健在である。

だが、本来冷泉院が担うべきであった課題、光源氏の栄華実現を優先するあまりに物語が描くことのできなかった、不義の子としての煩悶を背負う人生を、薫自身は生かされる宿命のようだ。薫はすでに匂宮巻で出生の秘密に感づいており、そしてまた、竹河巻では頭中将や柏木の和琴の音色を彷彿とさせると噂される。薫は人々の言外に常に、自らの出生の秘密へのざわめきを感じつつ、それを言葉にできずに息を凝らし、耳を澄ましているのであろう。そして冷泉院のもとで巡り合った阿闍梨に導かれるように、宇治へと遁走するのだが、その地でまざまざと、定かな証人である弁の君に巡り合うことになる。柏木の不義の証の文によって出生の真相を知った薫は、自らの言動に強い抑止を余儀なくされる。出生の秘事の伝播や暴露ではなく、それを知った薫の行動や思考に内向化させていくのである。

匂宮三帖は、いまだになお光源氏を讚美し懐かしみ続け、その瑕を決定的にあげつらうことはない。薫の出生の秘

事をあたかも遠巻きに見守りながら、夕霧も冷泉院も紅梅も玉鬘も、誰もそれを定かに語ることはない。それは、彼らが知らないからのか、語るべきでないからのか——。しかし、鬚黒家の「悪御達」の存在は、光源氏の呪縛からの脱却を予感させるのだ。光源氏の手から零れ落ちた、秘事伝播の決定的な回路がどこかにあることを、「紫のゆかり」とは異質な語りの場がどこかに存在させることを、竹河冒頭は確かに予感させている。

注

- (1) 武田宗俊「源氏物語竹河の巻について——その紫式部の作であり得ないことに就いて——」『国語と国文学』一九四九年八月、石田穰二「匂宮・紅梅・竹河の三帖」『源氏物語論集』桜楓社、一九七一年 など
- (2) 山脇毅「源氏物語匂宮巻以下の構想」『平安文学研究』一八、一九五六年五月、藤井貞和「匂宮十三帖の冒頭をめぐる時間の性格」『へいあんぶんがく』二、一九六八年九月、池田和臣「源氏物語竹河巻官位攷——竹河論のための序章として——」『国語と国文学』一九八〇年四月、池田和臣「匂宮・紅梅・竹河三帖の成立」『講座源氏物語の世界 第七集』有斐閣、一九八二年 など
- (3) 常磐井和子「匂宮・紅梅・竹河」『源氏物語講座 第四卷 各巻と人物Ⅱ』有精堂・一九七一年、三田村雅子「源氏物語第三部発端の構造」『日本文学』一九七五年十一月
- (4) 森一郎「竹河巻の世界と方法」『源氏物語の主題と方法』

- 一九七九年、桜楓社）、三谷邦明「玉鬘のその後」（『講座源氏物語の世界 第七集』有斐閣、一九八二年）、高橋亨「物語の語り手(2)——古御達の語り」（『講座源氏物語の世界 第七集』有斐閣、一九八二年）、神野藤昭夫「匂と薫——匂宮・紅梅・竹河巻——」（『源氏物語講座 第四巻 京と宇治の物語 物語作家の世界』勉誠社、一九九二年）など
- (5) 柏木密通と薫誕生の秘事を、夕霧がなぜ知り得ないのか、知り得た可能性はないのか、という問題については、高木和子『男読み 源氏物語』（朝日新書、二〇〇八年）および「源氏物語のからくり——反復と遡上による長編化の力学——」（『国語と国文学』二〇一〇年四月）で論じた。
- (6) 土方洋一「姉妹連帯婚」的発想」（『日本文学』一九八九年四月）
- (7) 鬼束隆昭「異説・別伝・紀伝体——竹河巻をめぐる——」（『日本文学』一九七五年十一月）
- (8) 注(5)高木著書および論文
- (9) 藤本勝義「源氏物語「竹河」巻論——光源氏の世界の終焉——」（『青山学院女子短期大学紀要』四六、一九九二年十二月）
- (10) 平林優子「竹河巻における玉鬘と冷泉院」（『東京女子大学日本文学』九三、二〇〇〇年三月）
- (11) 池田和臣「竹河巻と橋姫物語試論——竹河の構造的意義と表現方法——」（『源氏物語及び以後の物語 研究と資料——古代文学論叢第七輯——』（武蔵野書院、一九七九年）、星山健「竹河」巻論——「信用できない語り手」「悪御達」による「紫のゆかり」引用と作者の意図——」（『王朝物語史論——引用の「源氏物語」——』（笠間書院、二〇〇八年）など